

感性の変容

斧谷 彌守一

引き続き大きなテーマとして挙がっております。「感性の変容」ということで、私、斧谷が簡単にお話ししたいと思います。

この三月で終わりました第一期の学術フロントリア研究プロジェクトの中で、私が中心になりまして、「リアリティの変容？」というテーマでシンポジウムをやりました。その主な問題意識としては、サイバースペース、IT革命とか、テレビゲームとかが広がる時代の動きの中で、本当にリアリティは変化しているのか、根本的には変わらないのか、その辺のことをちよつと考えたんですけれども、それに引き続き、第二期では私が中心になりまして、「感性の変容」という形で一緒に考えていきたいと思っております。お手元のパンフレット（開所式で配布した小冊子）に「感性の変容」とありまして、「研究メンバーの一人の証言によれば……」というふうにありますけれども、それは実は私のこととして、この文章を書いたときに、自分の十代の頃のことを思いだしたわけです。高度経済成長の初期、昭和三〇年代、自分の思春期だったのですが、私は流行歌の主流だった演歌に抵抗感を感じていました。そこに、アメリカのフォークソングとかのボ

ピュラーミュージックが入ってきたので、よく聞いていました。それから私はおばあちゃんに連れられてよく映画を見に行きましたが、主には松竹大船調映画、小津監督などの映画をよく見ていました。それから、連れて行ってくれるおばあちゃん、アメリカの西部劇が好きだったので、アメリカの西部劇も非常に多く見ました。その当時、一所懸命読んだのは、例えば『次郎物語』とか、それからちよつどグリーン版『世界文学全集』が出始めた頃で、高一のときだったと思いますけど、そのグリーン版の『罪と罰』とかでした。その頃、私は広重が好きだったんですが、ルノアールも大好きでした。中学の美術の先生に、ルノアールの絵の持っている生命感が今の現代美術には欠けているんじゃないかというようなことをしゃべって、「そうだな」というふうに先生に言われたりしたこともあるわけです。それから例えば中学の時に出雲大社に行つて、すごく感銘を受けました。そしてその当時、アメリカにはケネディ大統領がいて、フロントリア・スピリットを唱えるその演説を聞いてすごく感激しましたし、ケネディが撃たれて亡くなった翌朝、新聞でそれを初めて見た時の衝撃というのは大きかったですね。そういう実にさまざまなものがあるわけですね。並存してました。私はその後、紆余曲折はあったにしろ、結局はドイツ文学を専門にしたんですね。ヨーロッパに憧れるという形でずっとそれをやってきました。そして、この数年前から、このように自分の中で並存していた過去のさまざまなものを、自分はどうもなおざりにしてきた、忘れてきたという思いがすごく強くなりまして、

このところ、かつてのことをいろいろと思い出すわけです。私が西洋へ、西洋へとなびいている間に、今、日本では感性のあり方というのはどうなっているのか、と考えるようになりました。

そこで今日、資料を用意しておりますので、ちょっとご覧いただきたいと思います。で、奇妙だなと思つてらっしゃる方が多いと思います。何しろ「かわいい」がテーマの記事ですからね。「日本はかわいい」。今日、何をしゃべろうかなと考えていたところ、たまたま四月一日・三日の朝日新聞の夕刊に、この「日本はかわいい 上・下」という記事が載つてましたので、「あつ、これにしよう」と思つたわけです。ハローキティ、キティちゃんというキャラクターがあるんですけども、このキャラクターが今、ヨーロッパの若者の間ですごくブームを呼んでいる。この記事には、「もうミッキーマウスなんて目じゃないね。あつちは子供向け。うちのキティは若者をつかんでいるんだから」と書いてある。ヨーロッパの若者にとってはキティちゃんというのは自分たちの仲間というように思われているわけですね。更に、「国家や力とはおよそ無縁な『かわいい』とある。記事を見ると、「ドイツでは日本マンガの雑誌の創刊が相次ぐ」という指摘もある。これはアメリカでもそのようですね。アメリカでも日本マンガの雑誌が創刊されている、予想以上に売れているらしいですね。そして、「弱いもの、子どもじみたものの中にも、優しさや思いやりなどの大切な価値があることを教えてくれる」と出てますね。「弱いもの、幼いものをプラスと考える価値観」、そういうものをキティちゃん

んが体現しているというわけです。「だから無理に大人になることを強制しない日本のマンガやアニメの文化」ということになるんですね。ヨーロッパでは大人になるという事は非常に強い自我を築くことであるということが一般に言われておりますけれども、日本からきたこのキティちゃんは、そのように無理に大人になることを強制しない、キティちゃんは、「弱いもの、幼いもの」として愛おしい。そういう形でヨーロッパの若者の間で歓迎されているということがあるようですね。

キティちゃんというのは変化してきているようなんです。一九七〇年ぐらいに生まれたんですが、その当時はまだ着る服が原色だった。ところが数年前からパステルカラー調のキティちゃんが登場し、日本でも若い女性の間でキティちゃんのブームというのがありまして、そのブームが今でも続いています。先日、サンリオショップに行つて、何かキティちゃんの変化のことを書いているものがありませんかと聞いたら、「いちご新聞」に関連のことが載っていると聞いたので、その新聞を買いました。その時にそのサンリオショップに入つていらっしゃるお客さんというのは若い女性だけでした。子供じゃないんですね。

若い女性がキティちゃんを好むということは、大人の西洋人から見れば、どうも奇妙な現象に思えるみたいですね。「ビジネスウィーク」という、アメリカの最も伝統のある経済雑誌に次のような文章が載っています。「ただ、私には、一〇歳を越えた年齢の人たちまでが、なぜこのかわいい小猫ちゃんに興味を持つのか、その理由がわからない」と不思議がっている

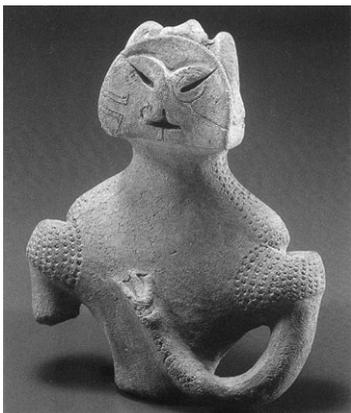
わけですね（以下、「この記事の日本語訳は「クーちゃん」の『海外通信』 <http://www.aa-alpha-net.ne.jp/hosaz/index.html>に拠る。）」の記事を書いているフレイアン・プレムナーさんは『Cawaii』という雑誌が出ているのに気づきました。学生に聞いてみると、自分たちのための雑誌ではないと言っていました。どうもあまり上品とは言えない雑誌のようなんですが、それはともかくとして、プレムナーさんは「Cawaii」という雑誌の編集長に取材して、次のような編集長の言葉を聞き出しています。「少女たちは、従順にふるまおうとしているのでは全くないと思います。男の子たちの注意をもっと引くために、少女たちはかわいらしくあろうと努力しているのです。この編集長の言葉を聞いて、プレムナーさんは納得してゐるんですね。たぶん全然違いますよね。そういう要素もあるんだらうけど、違つんだらうと思います。もう一度朝日新聞の記事に返っていただけますか。そこに、「フランスのパリでは昨年、日本のキヤラクターを集めて、『kawaii』とタイトルをつけた美術展が開かれた」というんですね。そこで「kawaii」がローマ字書きにされています。この記事には、ドイツの若者なんかも、「かわいい」という言葉を実際に日本語のまま使うようになっていて、というようにことが書いてあります。そこで思いついて、インターネットのGoogleというサーチエンジンを使って「kawaii」というローマ字で検索してみたところ、なんと一七万八千件ヒットしました。「kawaii」というローマ字で入力して一七万八千件、つまり、「かわいい」という日本語が世界的に認められているんですね。そういう

形で世界的に「かわいい」という言葉が、あるいは「かわいい」というキティちゃん、日本発で、何か無国籍な形で世界的に受け入れられつつある。ある意味では、グローバルゼーションという大きい動きに乗っかっているというわけです。でも、大人になることを強制してくる西洋、ヨーロッパで若者たちが「かわいい」という概念に飛びついたり、キティちゃんを愛好する場合と、日本の若い女の子たちがキティちゃんを愛好したり、あるいは何を見てもかわいいという場合とは、違つんじやないかという気がするんですね。このキティちゃんという口なし猫は変にのつぱりとした、何か陰影や興行きのない猫なんですね。日本で、こういうものを二〇代、三〇代の女の子たちがいつまでも愛好し続けるということとは、やはり何か変という感じがするんですね。

「かわいい」という言葉を小学館の『古語大辞典』で引いてみますと、「かわいい」の語義の二番目にある「痛ましくて見るに忍びない。気の毒だ。ふびんだ」という意味でだいたいで中世から使われはじめた。それ以前はどうも方言として、大衆の間で使われてたんじやないかと。文献に登場し始めたのは中世であつて、「気の毒だ、痛ましい」というふうな意味で使われ始めていた。それが、だんだんと「愛らしい。かわいらしい。子供っぽい」という意味に変わつてきて、現在ではそちらの「愛らしい。かわいらしい。子供っぽい」という意味の方に固定しているわけですね。それと同時に、江戸時代に、「かわいい」の二番目の「痛ましい」とか「気の毒、ふびん」という意味を表すために「かわいそう」という新しい

言葉が生まれてくるわけですね。そして現在では、「かわいい」と「かわいそう」という言葉が分化しているわけですが、けれども、一時期は、同じ「かわいい」という言葉に、「気の毒だ、痛ましい」という意味と、「愛らしい」という意味が同居してたんですね。私が考えるには、今の我々や若い人たちが「かわいい」という言葉を使っている場合には、やっぱり、愛らしくて、小さくて、幼くて、弱くて、愛おしいものを慈みたい、保護したいという感覚があるんだと思います。今でも、そこに「気の毒だ、痛ましい」という感覚がほんのかすかに残ってるんじゃないかなという気がするんですね。ただし、このあいだ学生に聞いてみたところでは、もう残ってないと思うというのが大部分の学生の意見でしたけれども、私は、かすかにですけども今でも残っているんじゃないかという気がするわけです。そしてその場合に、「かわいい」というのは「ビジネスウィーク」の元の英語では「cute」なんです。「かわいそう」は「pitiful」ですね。日本語の「かわいい」に、英語の「cute」あるいは「cuteness」を使っているんですね。ところが「cute」や「cuteness」は「acute」と語源が同じで、実は「鋭い」という感じですね。ですから日本語の「かわいい」という言葉の持っている語感とは全然違うんですね。ということとで、「かわいい」という概念は西洋の言葉では表せない。だから、日本語そのままの「かわいい」という言葉を使うということのようです。日本語の「かわいい」には、愛らしくて、小さくて、幼くて、弱いものに対する慈しみの気持ちがかすかに含まれているということ、非常に重要だと思

ます。弱いものへの慈しみには、その弱いものが生きものであるという、ある種の生々しい感覚、動物性の感覚が必ず伴っているはずなんですけれども、二〇代、三〇代の若い人たちがキティちゃんを「かわいい」と言う場合には、そういう生々しさの感覚が忘れられつつあるんじゃないかな。その意味で象徴的なのは、最近、阪神パークや宝塚ファミリランドが廃園になったことです。そこには動物園があつたわけですが、その動物園がなくなりまして。最近の若者はデートで動物園に行くことはないらしいですね。行くのはテーマパーク。テーマパークといえは本物の動物はいないということなんです。現代の「かわいい」からは、ある種の生々しい動物性のようなものがどうも抜け落ちてるんじゃないかなと思います。最後に縄文土偶をご覧下さい。ヤマネコじゃなかなと思われている土偶です（図を参照）。このヤマネコからは生々しい獣性が漂ってきますね。これも猫ですけども、キティちゃんには全くない生々しさですね。こういうものが忘れられているんじゃないかなというようなことを最近考えるわけです。



まるで発表に近いような感じになってしまい、申し訳ありませんでした。今お話ししたことを含めて、戦後日本における「感性の変容」ということを、文学、美学、臨床心理学、精神医学などの分野の方々も含めて考えていきたいと思っております。来年度から研究会を始めて、再来年度にシンポジウムという形にもっていきたいと思っています。
